

+ 2 3 【ぼうじゃくぶじん】

その年の冬の雪は半端（はんぱ）ではありませんでした。

まるで雪嵐（ゆきあらし）で、何日も何日も吹雪いていました。

大型台風（たいふう）が来たときだって、こんなに凄まじいことはありませんでした。

母親はぼろ家が飛ばされるか潰されるのではないかと心配し、ぼくは懐爺の祠のことを心配していました。

庭の柿の木も梅の木もなぎ倒され、雨戸を叩く音や、土壁が崩れる音は、懐爺が前に話していた、

【ふうじん】や、

【らいじん】が、やってきたのかと感しました。

「どうなっとるんじゃ」

ぼくが叫ぶと、母親は、

「天が裂けたんだよ」

と叫びました。

「てんは、さけるんか」

「山だって川だって海だって裂けるんだもの、天だって裂けるさ」

「わしらはどうなるんじゃ」

と叫ぶと、母親は、

「天に召されるよ」

と叫びました。

「じごくじゃのうて、てんごくかい」

「吹き飛ばされたら、地獄には行けないだろ」

なるほど、とぼくは雨戸をほんのすこし開けて天を仰ぎ見ました。

それだけでぼくの顔は雪まみれになり、それを拭ってさらに見ると、天空に巨大な黒い塊が見えました。

その天空に浮く塊は、闘う人の形をしていて、大きく武者震いをしていました。

どどどどど

ぶぶぶぶるん

どどどんどん
ぶるりぶるり
どどんぶるり

「あれはなんじゃ」

と母親を呼んで見せると、

「おやまあ、【ぼうじゃくぶじん】様の到来だよ」

と母親は掌を合わせました。

「【ぼうじゃくぶじん】たあ、なにものじゃ」

「暴風の神様だよ。噂には聞いていたが、この村には初めての到来だねえ」

また掌を合わせました。

ぼくは神様ではなくて、おぼけだとかんじました。

もし神様なら、こんなひどい雪嵐なんか起こすはずがないとおもったのです。

「わしらはどうなるんじゃ」

また叫ぶと、母親は、

「【ぼうじゃくぶじん】様が到来したからには、天国には行けない、地獄墜ちだよ」

叫びながら泣いていました。

「なくな。わしがなんとかするからのう」

叫びながら外にでようとする、

「金ちゃん、金ちゃん」

と母親は泣き叫び続けます。

すると、【ぼうじゃくぶじん】も、

「金ちゃん、金ちゃん」

と獰猛（どうもう）な声で叫び始めた気がしました。

「【ぼうじゃくぶじん】がよんどる。わしはいくど」

外にでようとするぼくの身体に、母親は必死で抱きつきます。

「地獄に行くのはまだ早いよ。まだ時間があるよ」

母親の腕をふりほどき、

「いっふんも、いちじかんも、かわらん」

ぼくは叫んで、雨戸を開け放ちました。

猛吹雪が室内に突入し、代わりにぼくは雪の中に突入しました。

すると、

「金ちゃん、金ちゃん」

なんだか【ぼうじゃくぶじん】の声が、やわらかくなった気がしました。

そして【ぼうじゃくぶじん】の姿が、天の、上の上の方へ昇っていくと、ふいに太陽が顔をだしました。

いつのまにか雪嵐はやんでいて、ぼくが振り返ると、母親が掌を合わせていました。

「かいじいのところへ、いくど」

ぼくが母親にひとこと伝えると、母親は鋤（すき）を持たせてくれました。

ぼろ衣を何枚も重ね着し、鋤を担いで、懐爺のところへ、祠へ、雪だらけの道なき道を、わきめもふらずに泳ぎまくりました。

やっぱり祠は大雪に埋もれていました。

入口の穴がどこなのかさえわからないくらいでした。

ぼくは鋤を使って、雪を掻（か）き、掬（すく）い、弾（はじ）き飛ばしました。

汗まみれになると、雪の上に寝転んで身体を冷まし、また汗まみれになる活動を、繰り返しました。

やった。

ようやく祠の穴が見えてきました。

「おうい、かいじい、いきとるか、しんどるか。おうい、かいじい、いきとつても、しんどつても、へんじをせいや」

穴の奥にむかって叫ぶと、

「半分死んで、半分生きています。金ちゃんが来てくれなければ、酸欠（さんけつ）で死ぬところでした」

懐爺はのっそりこんと姿を現しました。

ぼくの喜びは言葉では表せません。

汗が目に入ったのか、泪があふれました。

「やっぱりかいじいは、ふじみじゃのう。【ぼうじゃくぶじん】なんかには、まけぬのう」

「いやはや、やれやれ。【ぼうじゃくぶじん】はいわば天地自然のおぼけですから、わたしとしたことが、完全に負けそうでした」

懐爺の顔に笑顔が生まれました。

その顔を見て、ぼくも泣き笑いをしました。